

しまね読進協 第52号

発行日 令和7年2月1日

発行所 島根県図書館協会 読書推進運動協議会部会 (松江市内中原町 52 番地 島根県立図書館内)
ホームページ <https://www.library.pref.shimane.lg.jp/toshokankyokai/dokushosuishin.html>

令和6年度

島根県図書館協会の主な事業

◎市町村読書普及研修会

11月21日(木)くにびきメッセ

(現地及びオンライン開催)

講演

「絵本の楽しさを子どもたちに」

伊藤 明美氏(元浦安市立中央図書館)

事例報告

「子どもたちに本を届ける」

浦安市立中央図書館の取組

相馬 幸代氏(浦安市立中央図書館)

◎公益社団法人・読書推進運動協議会より表彰

全国優良読書グループ

わくわく沢っ子読書ボランティア

(奥出雲町)

◎島根県図書館協会表彰

読書推進運動功労者

おはなしさくらんぼ(松江市)

◎読書体験記の募集

応募数 23編

入賞 3編

◎「この本いいよ!」島根の高校生・高専生

おすすめの一冊」投稿の募集

応募団体 8学校

応募数 109点

◎機関誌等の発行・配布

「しまね読進協」第52号

男女共同参画社会実現のために

あすてらす情報ライブラリー

あすてらす情報ライブラリーは、島根県立男女共同参画センター(愛称:あすてらす)が平成十一年に開設した当初から(公財)しまね女性センターが運営しており、令和五年度より、島根県図書館協会に加盟しました。

当ライブラリーでは、女性に関わる様々な問題や男女共同参画社会の実現のための資料を中心に収集しており、個人貸出はもちろん、研修や学習などご利用目的に合わせてまとめて貸し出しをする「パッケージ貸出」で、学校や各企業・団体様への貸出もしています。

遠方の方や身体の不自由な方などのためには、貸出の際に掛かる送料は無料とし、利用者には返却時の送料のみ負担していただく「郵送貸出」も行っています。

また、令和四年度からは島根県立大学と連携し、キャンパス内の図書館にあすてらす情報ライブラリーのコーナーを設けることで、学生の皆さんへの貸出も可能となりました。

地域や年齢などが利用の妨げにならないよう、こうした活動は今後も継続していきます。

あすてらす館内での催しにも力を入れています。男女共同参画に関する記念日や時事問題に合わせて特集を組む「テーマ展示」では、様々なテーマに沿って図書を紹介しています。その一つとして、三月八日の国

際女性デーにちなみ、シエンターや女性の生き方、健康などに関する名著を課題図書とし、読まれた方からお寄せいただいた感想やメッセージをパネル展示する「今こそ読みたい!おとなの課題図書」を行いました。参加者には、これまで自分では選ばなかったような本との出会いや、大人になった今だからこそその気づきや感動、文章を紡ぐことの楽しさに触れていただくことが出来ました。

また、毎月一回、あすてらすホールで映画上映会を開催しています。情報ライブラリー所蔵のDVDを上映し関連図書を展示することで、これまでライブラリーを利用したことがなかったという方にも足を運んでいただけるようになりました。

蔵書約二万冊の小さな専門図書館ではありますが、ここにしかない図書や多くの資料、DVDを所蔵しています。今後も、長年ご利用いただいている利用者の皆様はもちろん、一人でも多くの方々に男女共同参画への理解を深めていただけるよう、こうしたイベントや利用者の皆様に寄り添ったサービス、SNSでの情報発信など、工夫を重ねていきたいと思いません。



読書体験記 入賞作品

〈一般の部〉

信仰対象

福島 雪枝（松江市）



『14歳からの哲学』
池田晶子 著
トランスビュー

ショックを受けた。

当時、私はテレビ・ラジオ・マンガ位しか楽しめない上、友達もいない灰色の引きこもり中学生だった。昼の外出が怖かった時期で、その日、夜の散歩がてら歩いて行ける距離にある本屋に寄った。プラプラと棚を眺めながら冷ややかにしていたが、池田晶子の『14歳からの哲学』が目についた。そういえば哲学って何なんだろうと手に取ったのが私と信仰していた宗教との決別だった。

ある事情から祖母と二人暮らしでおばあちゃん子だったので、祖母の影響から、とある新興宗教の信徒になり、家にある『経典』を読み漁っては『おことば』に感銘を受けていた。しかし、『14歳からの哲学』には答えらしい答えを書いておらず、さあ、自分で考えてみようかと問い掛けるのだ。本や家に溢れた『経典』には答えが書いてあり、それが世界の真実だと思っていた私にとって頭をかち割られたような衝撃を受けた。目の前の言葉は本当かどうか考えていたか？ただすがりたくて盲信したかっただけではないか？中学生だったので仕方がない側面もあったと思うが自身の信仰を疑った。

以後、祖母を傷つけないようにやんわりと宗教から離れて、図書館に行くため昼も出られるようになり、多くの本を一助に多角的、客観的に物事を考えるよう努めるようになった。友達がいなくてもいい、も気にしなくなった。本の中では友達がいなくてもいい、少ないのが珍しくないからだ。本は多様な価値観と指針をも教えてくれる。

さらに幾年、祖母は亡くなり、池田晶子も故人となつてしまい、結婚を機に『14歳からの哲学』も手放した。家事に育児にと日々の生活で忙しく、大小の悩みに直面することもある中、今も私は宗教を必要としない。

読書は私の恩人である。宗教から孤独から灰色の部屋から救ってくれた。救う？もしかしたら私は読書を信仰しているかもしれない。だがそれでいい。今も忘れられない、通信制課程の高校生だった、よく分からないヘーゲルを読んでみていた県立図書館二階奥、開かれていた窓からは初夏の緑と光に反射した水面がまぶしく、爽やかな風と共に堀川遊覧船の船頭の声が乗ってきていた。あの窓から、子の笑顔を見られる今の彩りある生活に繋がっているような気がしてならないのだ。

本を、読書を、信仰してきて良かったと今、思った。

審査員コメント

1冊の本との出会いがもたらした心情の変化と、感謝の気持ちがよく伝わってきました。



〈児童・生徒の部〉

知るといふこと

西田 天舞（島根中央高校）



『明日の子供たち』
有川 浩 著
幻冬舎

児童養護施設という言葉を知って人はどんなイメージを持つだろうか。これは作中に出てきた問いでもある。この『明日の子供たち』という作品には児童養護施設を舞台に、登場人物たちの繊細な心や感情が丁寧に描かれている。その序盤で私が感じたことは言い表せないほどの驚きだった。なぜなら作中において主人公の純粋な優しさから生まれた言動が真つ向から否定されたからである。だが私は、こう考えた。たとえそれが善意や優しさゆえのものであっても相手のためにならない場合や相手からすれば負担に感じる場合がありうるのだと。このことに気づいた私は一気にこの作品に引き込まれた。

ここで冒頭の質問に戻る。私は心のどこかで、児童養護施設の入所者は「かわいそう」な人たちと思っていた。なぜなら何かのトラブルがあつてその施設にいて、普通では考えられない経験をしているからだ。だが、読み進めていくうちに私は奏子に共感せずにはいられなかった。それは私も児童養護施設に保護された経験があるからだ。入所時、私は心が一杯いっぱいでも感じられない状態だった。しかし施設で過ごすうちに次第に心が軽くなり、救われたように感じたことが思い出された。だからこそ奏子の「かわいそう」と思っただけでなく、救われた強い共感を覚えたのだ。そして私は「こも思った。

当時の私達ならどう感じたのだろうか。私は「かわいそう」と人から言われたら、改めて言いようのない悲しさに襲われてしまうと思う。

「かわいそう」という言葉は時に人を大きく傷つける言葉だ。それに気づいた私は安易に「かわいそう」と使うことを辞めた。言葉選びには慎重になるよう努力することにした。

しかし現実には照らし合わせれば、施設入所者は恵まれない環境にある人々であることに間違いはない。「かわいそう」な子として同情できないとするならば、周囲はどう接すればいいのか。私は考えた。「かわいそう」と思ってしまうのはその人のことを深く知らないからだ。だから自分の考えで物事を語ったり計ったりしてしまう。相手の立場になると見え方や考え方も変わる。そしてその人の境遇にただ目を向けるだけではなく、その人個人の内面や良さにも目を向けてほしい。そうすればきっと認識が変わるはずだ。

私にはもう一つに残った部分がある。子どもたちが「日だまり」の存続をかけて立ち上がり戦う場面だ。「響け、届け、穿て。」まだまだ幼い未成年の主張。緊迫した空間に語りかけられる子どもたちの思い。彼らには彼らの思いがあり、自分の思いを叶えるために行動する強さだ。持っているのだ。そのことが読者である私にも伝わって胸が震えた。

私は施設のこと、そこで暮らす人々のことについてもっと多くの人に知ってもらいたいと思う。そして子どもたちの強さや行動力をどうか信じて、時には厳しくそして温かく見守ってほしいと今、強く願ってやまない。

審査員コメント

自分の経験と、本の内容が重なり、共感から得た感情を、これからの生き方へ反映させようとしてる。

私が変われた理由

長岡 瑞歩（出雲商業高校）



『びりっかすの神さま』

岡田 淳作
偕成社

私が本を読むことが好きになったのは小学三年生のときでした。そのきっかけになったのはある一冊の本との出会いです。

私は小学三年生に進級すると同時に転校しました。新しい学校、まだあまり知らないクラスの人たち、そして今よりずっと人見知りな私。幼かった当時の私は不安なことばかりでした。幸い、私のクラスの人たちは優しく明るい人たちが多かったので積極的に話しかけてくれました。仲良くなるのも早く、友達ができた私はとても安心しました。担任の先生も優しく朗らかで、でも怒ると少し怖い、面白い先生でした。

小学三年生に進級して一ヶ月が経った頃、担任の先生が一冊の本を私たちに紹介してくれました。その本は『びりっかすの神さま』という本でした。とても面白いからみんなに読んでみてほしい、先生は笑顔で楽しそうにそう言いました。私は本は嫌いだはないけれど、そんなに読んだこともない、でも少し面白そう。最初に思ったのはそんな感想でした。一方、クラスの人たちは外で遊んだり、友達とおしゃべりをするのが好きな人が多く、本を読む人は少なかったと思います。すると、先生が明日から昼休みにこの本を読み聞かせしてあげる、そう言いました。読み聞かせなら聞いてみようかなと思い、翌日の昼休みに何人か集まって座っている場所へ行

き、同じように座って先生を待っていました。そして、先生は昼休みが終わるチャイムが鳴るまで読み聞かせしてくれました。その本は主人公の始が転校し、転入したクラスで背中につばさのある男を目撃する。その男はピリの人だけに見える神さまだった。やがて、子どもたちは競争や勝ち負けについて考えはじめるという内容の本でした。毎日数ページずつ読み進めていくうちに、私は本に興味を持ち、本を読むことがとても楽しいと感じるようになりました。読み聞かせしてもらっている以外の本を読んだみたり、主人公の立場に私になったらどうするのだろうと考えてみたりするようになり、読み聞かせしてもらっていた本を全て読み終えた後、私は先生にお礼を言いに行きました。本の内容は自分の立場を考えるきっかけになったこと、本を読むことが好きになったことも伝えてみました。先生は、本を好きになってくれて嬉しい、面白い本を見つけたらぜひ教えてほしいと言ってくれました。私は、この本と出会えてよかったと心からそう思いました。

私は今でもよく本を読みます。あの本に出会ってから私は、自分の考えが大きく変化していき、人見知りも当時よりはしなくなりました。私は、これからも本を読みたい、そして今度は私が本を紹介する立場になりたいと思います。

審査員コメント

本を好きになった担任の先生とのエピソードが素敵です。本当に本が好きの人が好きな本を勧めることと伝わるのだと読み聞かせの大切さを認識させてもらいました。



令和6年度

読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人読書推進運動協議会から、「わくわく沢っ子読書ボランティア」が全国優良読書グループとして表彰されました。

◆わくわく沢っ子読書ボランティア(奥出雲町)

代表者 景山 雅美

平成5年4月に、小学生の保護者が集まり「読み聞かせの活動がわくわくするものであってほしい」との願いを込めて発足しました。年6回、学校帰りの小学生を対象に、公民館で、読み聞かせや押し花を使った葉作りなど、四季の行事に合わせた読書会を行っています。必ず本を二冊ずつ読むことをベースにしており、令和5年からは、そのうちの1冊を子どもが当番制で読むようになりました。

始めてから30年、公民館や地域の方々の協力を得ながら活動を続けています。現在のメンバーは8名です。

島根県図書館協会読書推進運動協議会部会では、読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な団体及び個人を毎年表彰しています。今年度は一団体を表彰しました。

◆おはなしさくらんぼ(松江市)

代表者 田部 和美

平成24年度より活動を始めました。松江市立図書館で子どもを対象とした「ストーリーテリングのおはなし会」を定期的に開催しています。現在の会員数は9名です。

また、松江市立図書館「お話し出前事業」に協力し、市内の幼稚園・小学校・中学校に出かけてお話しを語る活動を続けています。現在は、幼稚園3園、小学校4校、中学校1校を担当し、年間に約50回お話し前に出かけています。

この本に一票!

島根の高校生・高専生
おすすめの一冊

今年も県内の高校生、高専生から109点のおすめの本の投稿がありました。その一部を紹介いたします。
※一部編集して掲載しています。



『旅する54字の物語』

氏田雄介／編著 PHP研究所

54字に日本の魅力を詰めた、魅力溢れる物語。詰める途中で漏れた一部の魅力は、解説の方に溜まって無駄がない。

解説

9マス×6行の原稿用紙に収められた「54字の物語」シリーズの第7巻！
本作のテーマは「都道府県」。日本の魅力を54字に詰め込んだ82話で楽しく都道府県が学べる！物語の次ページには「解説」と「54字には収まらない魅力」が掲載されて、何度も楽しめる！ (3年 T.K.)



『せんそうがおわるまで、あと2分』

ジャック・ゴールドスティン／作 合同出版

(1年 K.J.)

